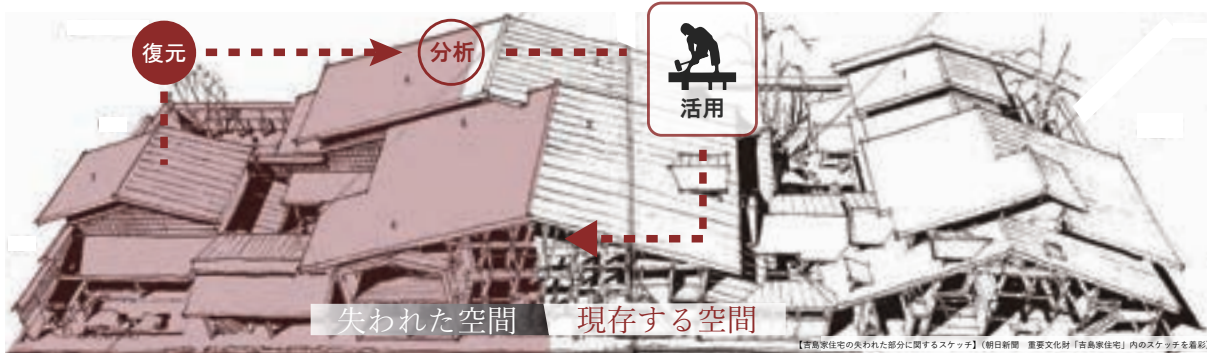




2 計画目的

2-1. 「吉島家住宅」の再生と分析

再生を行うことにより、現存する建築とは全く異なる空間の構成を明らかにすることを目的とする。吉島家住宅の消失された部分について再生、現存部分と合わせての分析を行うことで、再生した空間の特徴について考察する。



2-2. 再生空間を利用した展示施設的设计

大正11年時の復元モデルを作成・分析したうえで、復元空間の特徴を活かした展示施設を設計する。また工房を複合することにより、伝統工法の技術継承に寄与する場となるよう計画する。

1 計画背景

1-1. 重要文化財「吉島家住宅」

飛騨の建築技術は古くから神社仏閣の建立に関わるなど日本有数であり、「吉島家住宅」はその高い技術が反映された町家である。立体格子状に組まれた梁組は、特に優れた意匠であるとされ、この梁組のある本屋、そして中庭と文庫蔵は国の重要文化財として指定されている。



【吉島家住宅の外観】(筆者撮影)



【吉島家住宅の失われた部分】(朝日新聞重要文化財「吉島家住宅」内の図面を着色し作成)

1-2. 「吉島家住宅」の現状

日本における民家建築の最高峰とも言われる吉島家住宅は、過去に2度の再建と1度の大改築を行っており、大正11年(1922年)の大改築後がこの建築の最大規模であった。しかし、財政難により屋敷の約3/5を失い、失われた部分は現在、市営の駐車場となっている。そしてそこには現存する建築とは全く異なる空間が存在していた。大正11年当時の空間についての正確な図面は存在せず、6代目当主である吉島(休兵衛)忠男が、自らの記憶を元に描いたスケッチ、そして数枚の写真、図面が残るのみである。

時代	当主(休兵衛)	年代	関連事項	詳細内容	
江戸	初代 康兵衛(〇〇～1823)	天明4年(1784)	尾城藩から高山に出でる	生糸産業から始まり後に醸造業を営んだ	
	2代目 久兵衛(〇〇～1835)				
	3代目 甚兵衛(〇〇～1843)				
明治	1843 4代目 寛文(1837～1915) 増子であると同時に、醸造業、金銀業を中心としながら生糸業、絹織などを営む一家運は衰え果えた	明治8年(1875)	高山の大火により被災	【解説】西田伊三郎 立派に建てた目下廊下よりもやがや形式表通りに発行して2階分の幅で敷き見る(表廊下側・道端からみせ2階までの部分) 【解説】西田伊三郎・西田四郎・内山新造・福元次 明治9年のものはほぼ再現だが、壊れた表廊下部分に改築部分を見ても不明建築の中には大抵から使用されているものもある 西田が死した本敷まわりと上層部などの造作を内山が引き継ぐ	
		明治9年(1876)	酒蔵		
		明治12年(1879)	目下廊下改築		
		明治38年(1905)	再度焼焼		
		明治40年(1907)	酒蔵		
		大正	1915～ 5代目 千鶴(1830～1927) 酒蔵の築造開始 →金銀関係の事業上移住		大正11年(1922) 明治12～14年 (1923～1925)
1927～ 6代目 忠男(1900～1992) 脚取りを失った悲劇を守るため →使用人が少なくなった	昭和2年(1927) 昭和14～20年 (1939～1945)		酒造廃業 第二次世界大戦のため蔵は軍の倉庫に	酒蔵、米蔵の跡には軍需物資が収納され、裏側の管理は行方不明だった	
昭和	昭和22年(1947) 昭和40年(1965) 昭和41年(1966) 昭和42年頃(1967頃)		昭和22年(1947)	本蔵の取壊しの大売立	マッカーサーの敷地改革の影響でこのほど取壊しされた また、この敷地改革により多くの土地が解放されたため売却された(なごり) 3つのプランにそれぞれ売り流していき、最終的には米蔵と材木蔵を売った上層部は残った
			昭和40年(1965)	酒蔵の3/5を失い現在の姿	【解説】 重要文化財指定 市の協力のもと補修・整備
平成	1992～ 7代目 忠男(1939～)(現当主)	1992～		市が引き取りし土壌の空気を改めて買収し市営駐車場として整備 むき出しの屋根を暫定的に補修し表裏のカラー塗装張り直り	

【吉島家年表】(研究室PJで作成)

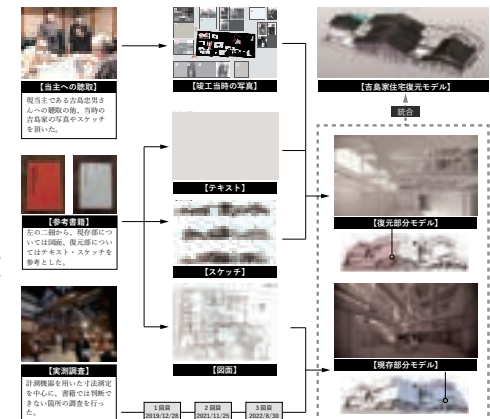
3 調査

3-1. 再生方法

再生するにあたり、朝日新聞出版:「重要文化財「吉島家住宅」」を参考として、これに記載された図面、現存部の写真、大正11年時の吉島家住宅に関する記述とスケッチをもとに再生を行った。書籍では判断の難しい部分については、実測調査、現吉島家当主への聴取を行い、得られた情報をもとに再生を行った。再生の対象は「大正11年時の吉島家住宅」とする。理由は、「大正11年当時はこの建築の規模が最大であり、現在重要文化財指定されている箇所と併せて、最も飛騨の伝統工法が反映された状態である」と考えたからである。

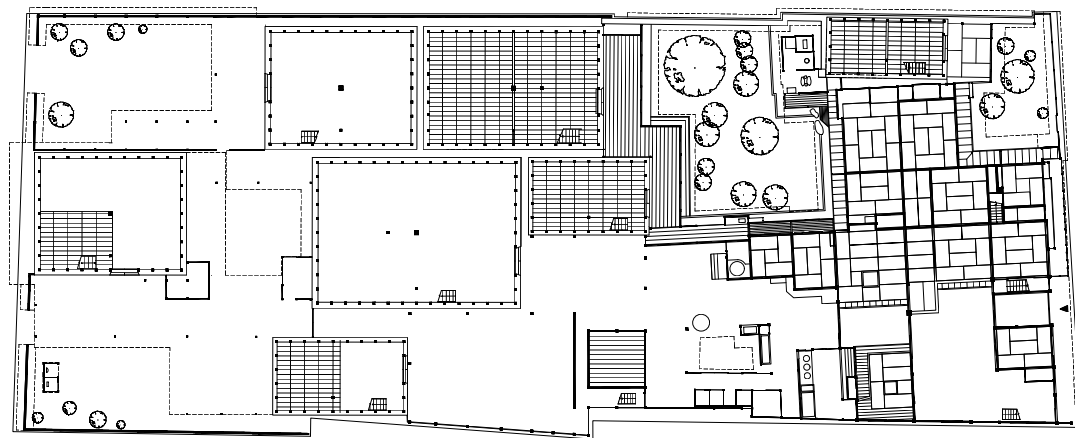
3-2. 「建築デザインII」における再生について

吉島家住宅の再生については、日本大学大学院の授業である「建築デザインII:佐藤光彦ユニット」の課題、また所属する佐藤光彦研究室のプロジェクトとして取り組んだ。行なった作業の流れについて、作業内容を一部抜粋して表記する(▶写真:筆者撮影、図面・スケッチ:朝日新聞 重要文化財「吉島家住宅」より引用、パース:研究室PJにて作成)。



3-3. 大正 11 年時の「吉島家住宅」3D モデルの作成

以上のような調査を中心に作業を続け、大正 11 年時の「吉島家住宅」の 3D モデル、模型、図面集を作成した。



【吉島家住宅再生平面図 S=1/200】

4 分析

4-1. 空間の分類

デザインIIにおいては機能・空間の使いわれ方によって空間の分類を行った。



	A	B	C	D	E	F
機能	居住/生活	生活	生活/生産	生産(農園)/加工	作業/倉庫	作業/倉庫
屋根/たなき上層	屋根/たなき上層/階段	屋根/たなき上層/階段	屋根/たなき上層	屋根/たなき上層/階段	屋根/たなき上層/階段	屋根/たなき上層/階段
床の有無	なし	実床/土蔵/床	なし	実床/土蔵(溝物)	土蔵(溝物)	土蔵
壁の有無	なし	中庭/風庭	なし	なし	なし	なし

4-2. 分類した空間ごとの分析

空間 D、E、F について、「床の素材の違い」、「開けた空間/閉じた空間」、「屋根の有無」により色分けし、空間を成立させている成分・要素が何かについて考察を行う。

色分け	分類 D			分類 E			分類 F		
	屋根伏図	開けた空間と閉じた空間	床の違い	屋根伏図	開けた空間と閉じた空間	床の違い	屋根伏図	開けた空間と閉じた空間	床の違い
要素	 屋根伏図	 開けた空間と閉じた空間	 床の違い	 屋根伏図	 開けた空間と閉じた空間	 床の違い	 屋根伏図	 開けた空間と閉じた空間	 床の違い

4-3. 設計可能性

D1
複数の蔵を覆う大屋根

「朝日新聞重要文化財「吉島家住宅」内の図版を撮影し作成」

D2
蔵と蔵の隙間

「朝日新聞重要文化財「吉島家住宅」内の図版を撮影し作成」

D3
立体格子状の梁組

「朝日新聞重要文化財「吉島家住宅」内の図版を撮影し作成」

E1
接する光庭

「朝日新聞重要文化財「吉島家住宅」内の図版を撮影し作成」

E2
分節された蔵の内部

「朝日新聞重要文化財「吉島家住宅」より引用」

E3
宮川が臨める下屋

「朝日新聞重要文化財「吉島家住宅」内の図版を撮影し作成」

F1
庭を開く下屋

「朝日新聞重要文化財「吉島家住宅」内の図版を撮影し作成」

F2
開放的な庭

「朝日新聞重要文化財「吉島家住宅」内の図版を撮影し作成」

4 分析

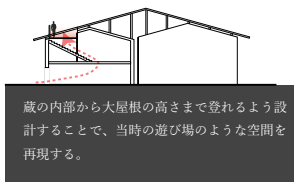
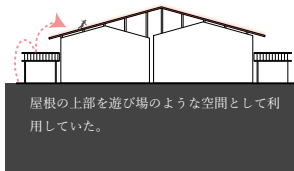
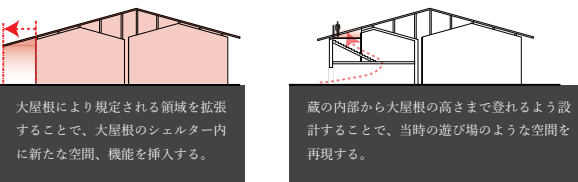
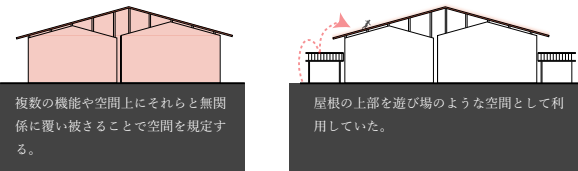
4-3. 設計可能性

分析結果から設計の可能性について検討する。今回の分析結果から再生部分に関して、D-Fの3つの空間構成に分類することができる。それらの空間内の特徴的な要素に関して、どのような空間が提案し得るか、それぞれについて検討を行う。

D1 複数の蔵を覆う大屋根

空間を規定する装置

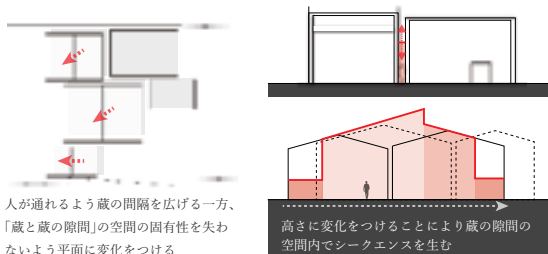
蔵を覆う面



D2 蔵と蔵との隙間

蔵と蔵の幅が狭いことによる奥まった空間

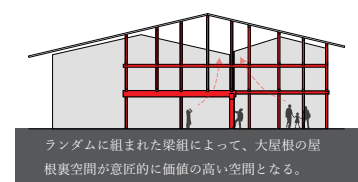
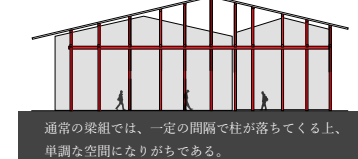
蔵の配置による迷路のような空間



D3 立体格子状の梁組

大屋根を支える部材

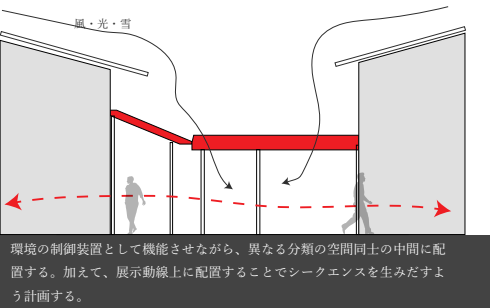
意匠的な価値



E1 光庭

通風・採光・雪落のための空間

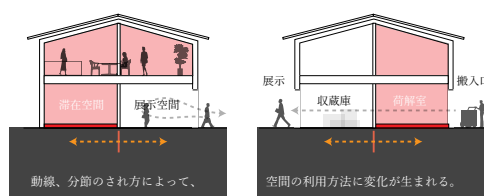
異なる分類の空間同士の中間領域



E2 分節された蔵の内部空間

床の材の違い

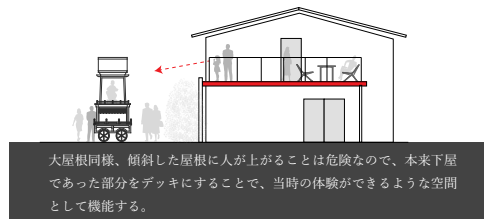
内部の異なる分節のされ方



E3 宮川を臨む下屋

遊び場の様な空間

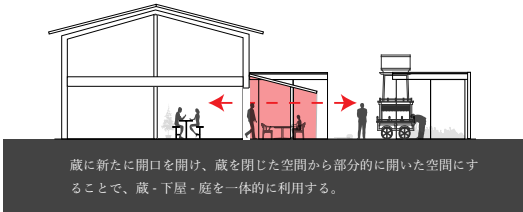
眺望がきく場所



F1 庭を囲う下屋

傾斜した屋根

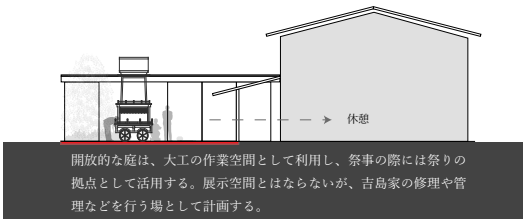
庭と建築の中間領域



F2 開放的な庭

裏どーじ空間とは対照的な空間

他とは分離された空間



5 計画概要

5-1. コンセプト

調査から得られた大正11年時の空間の特徴を活かしながら、再生部分を展示空間として計画する。異なる特徴を持つ空間を移動しながら、その空間の変化を体験できる建築として、吉島家住宅を再設計する。

5-2. 計画敷地



5-3. 現存部分との関係性

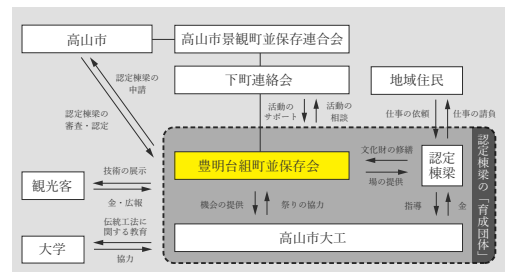
本計画では、区分c、d、eについて、以下の方針のもとに設計を行う



区分	現存部分	大正11年時の空間が残っている部分	設計方針
a	○	○	維持
b	○	○	維持
c	○	○	外装の変更、開口部の変更を行う
d	○	○	大正11年から残っている一部を維持しながら、当時の空間を復元する
e	○	○	大正11年時の空間の特徴を活かした「復元」を行う

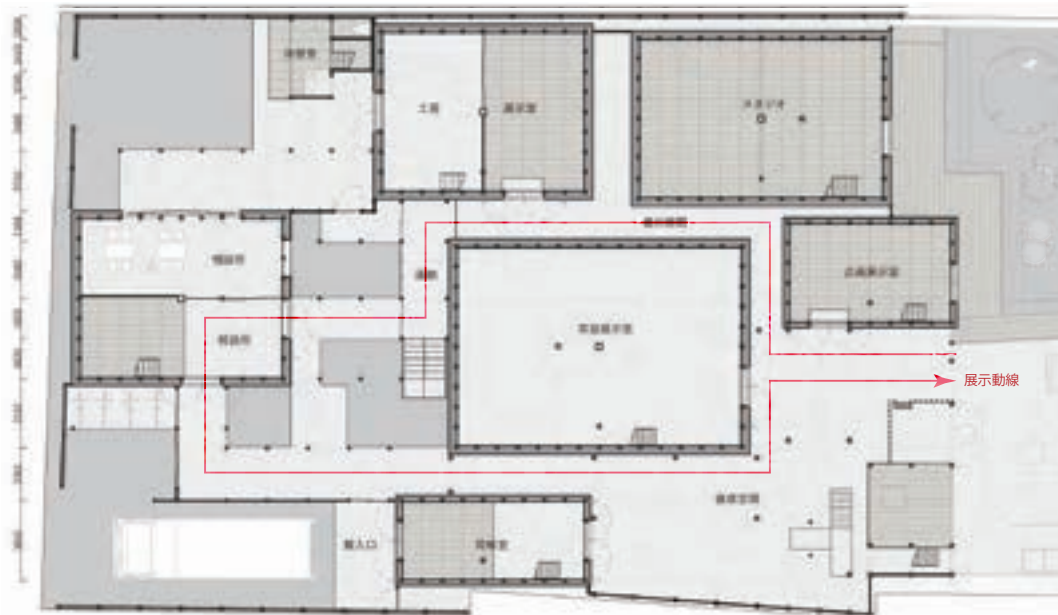
5-4. 運営計画

高山では、江戸時代の町内会組織単位である「組」が景観町並保存連合会を組織し、歴史文化遺産の保存・活用を行っている。この組に着目し、吉島家住宅の所属組である豊明台組町並保存会を中心とした運営団体を計画する。（出典：高山市歴史的風貌維持向上計画）



6-1. 平面図

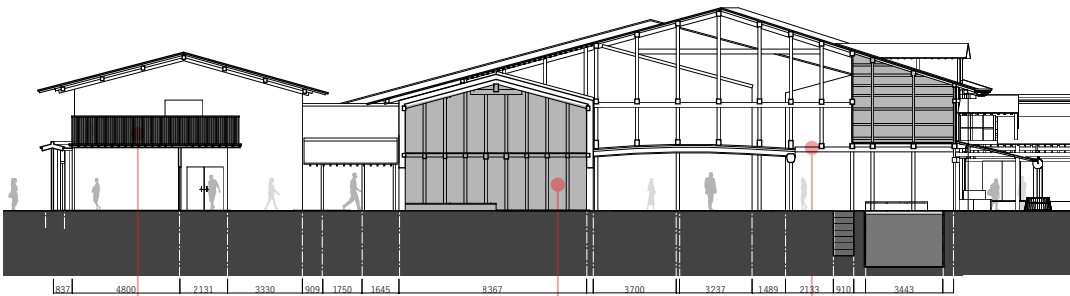
1階再生部分の展示は、現存部からアクセスするよう計画した。各展示室のほか、蔵の隙間、画廊、光庭、下屋など、酒蔵を中心に一周できるよう動線計画を行った。2階レベルの梁組は1部現存しているため、現存部の梁組を1部利用する形で梁を組む。各蔵の2階は1階部分を補助する空間として機能する。



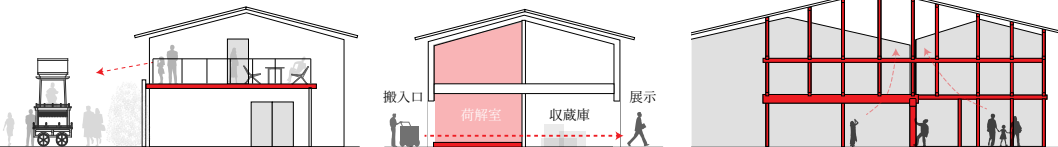
【1階平面図 S=1/50】

6-2. 断面図

分析で得られた特徴的な空間を活かした設計を行った。漬物蔵の下屋であった部分は、傾斜した屋根に人が上がることは危険なので、下屋であった部分をデッキにすることで、当時の体験ができるような空間として設計した。米蔵であった部分は、蔵の開口を増やし、搬入する際の荷解室、兼取蔵庫として計画した。2つの機能は床の素材の違いにより分節される。架構・大屋根・梁組は、それら自体が展示でありながら、再生部分と現存部分、そして各展示室を繋ぐ。



【長手断面図 S=1/100】



大屋根同様、傾斜した屋根に人が上がることは危険なので、本来下屋であった部分をデッキにすることで、当時の体験ができるような空間として機能する。

動線、分節のされ方によって、空間の利用方法に変化が生まれる。

ランダムに組まれた梁組によって、大屋根の屋根裏空間が意匠的に価値の高い空間となる。

6-3. 模型写真 / パース

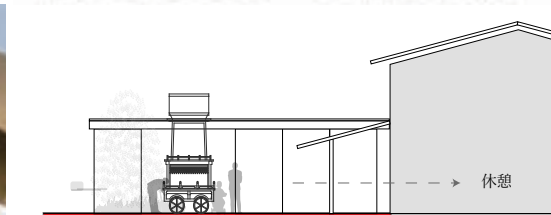
本計画では吉島家住宅の再生を通し、大正11年における吉島家住宅の空間の特徴について示した。そして、その特徴を抽出し、一部では再生、また一部では整備を行うことで、復原の手法を提案した。



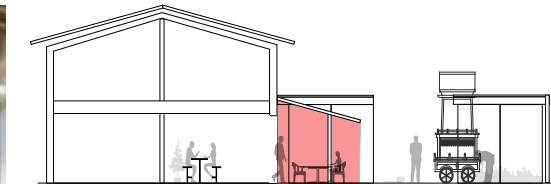
常設展示のイメージ



【2階平面図 S=1/100】



開放的な庭は、大工の作業空間として利用し、祭事の際には祭りの拠点として活用する。展示空間とはならないが、吉島家の修理や管理などを行う場として計画する。



蔵に新たに開口を開け、蔵を閉じた空間から部分的に開いた空間にすることで、蔵・下屋・庭を一體的に利用する。



蔵の隙間

立体格子状の梁組



下屋に囲まれた光庭

旧廻室

7 参考文献

- 1) 朝日新聞：重要文化財「吉島家住宅」
- 2) 伊藤ていじ：建築家・休兵衛
- 3) 文化財保護の望ましいあり方と実現方策（調査総括）
https://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/souhatsu/h18seika/03kyoto/03_bunka_03honpen2.pdf
- 4) 文化財保存活用に取り組み民間の団体の事例
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunkazai/kikaku/h29/11/pdf/1397006_05.pdf
- 5) 地域づくりを支える伝統工法の継承に向けた保全・活用方策
http://humanscape.main.jp/wp-content/uploads/2019/12/1903_Traditional-Construction-Methods.pdf
- 6) 文化庁HP：「重要伝統的建造物群保存地区一覧」と「各地区の保存・活用の取組み」
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/hozonchiku/pdf/93738601_43.pdf
- 7) 高山市HP：高山市歴史文化基本構想
https://www.city.takayama.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_001/000/836/takayama.pdf
- 8) 高山市HP：高山市都市基本計画
https://www.city.takayama.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_001/005/734/toshikhonkeikaku.pdf
- 9) 山岸常人：「文化財復原無用論」- 歴史研究の観点から -